

## いわれなき虜囚の手記

熊本県 上田 敬夫

### 一 ソ連に抑留入ソまでの概略

一九四五年八月十五日、ラジオ放送終戦詔勅はかすれ  
てよく聞きとれなかったが、戦争は終結した。上部機関  
からは何らの指示がなく途方に暮れた。渡辺総務科長と  
二人が二回ほど間島省公署へ出向いて伺ったが、何のき  
きめもなかった。

八月二十二日、夕闇迫るころ、宮崎副県長は、これか  
ら白頭山を目指して逃避する旨を示達した。家族もろと  
も日系職員全員子供に至るまで、リュックを背負い、県  
公用トラックに分乗した。出発間際、陣洋根和童県長が  
ソ連朴アンドレ少佐を伴い県長室からおりてきた。ソ連  
は日本人の生命は保障すると言っているので逃避はやめ  
てはどうかと慰撫した。宮崎副県長はしばらく考えてい  
たが、皆さんはどうするかと聞いた。皆はよそう、それ

ならばと答えた。下車に一決して我が家へ戻った。

明けて二十三日午前、日系警察官集合が伝達、我々は  
県公署前広場へ集まった。一人の将校が私の服装を見て  
か、両手を胸に当て、左手の母指と人指指でまるをつく  
り両手で上下にさすり、誇らしげににんまりほほ笑み、  
齒をむいた。

これを見た私はしまった。一ばい食わされたが、ただ  
ならぬいやな予感を覚えた。案の定、その後は厳しい尋  
問が始まった。ぼくの担当は憲兵中尉のゲー・ペー・  
ウーだった。机上の銃をちらつかせては、「上田、戦争  
は終わり日本は無条件降伏をした。これからは何事も隠  
さず語り合ひましょう。」となれなれしく出てきた。口ぶ  
りは極めて穏やかだが、眼光は鋭く敵意に満ち、銀髪  
の赤ら顔、ズングリした骨太の偉丈夫、二十五か二十六歳  
の油断ならぬ男だった。スパイを何人持っていたかを基  
本に、繰り返し反復三復、執拗に迫るのであった。ぼく  
は、スパイはいなかった、その必要もなかった。そのか  
わり防諜に関しては全県民を動員、挙げて徹底してい  
る。自衛団、分駐所、旅館も飲食店もすべて目を光らせ

ている、と応酬力説したが、承知しない。うそを言うな、  
ためにならぬぞと、拳銃をあやつり白状を迫った。彼は  
また、自分はドイツに諜報員で派遣されていただけのこ  
とで自分の父はヒットラー・ドイツ軍に殺されたとも  
語った。これは異様な意味ありとも受けとれた。そして  
午前二時まで続いた。この間、上司の憲兵少佐が新しい  
軍帽にあごひもを締め、黒の長靴をはき将校のマントを  
羽織り派手な身なりでやってきた。明日は敦化方面に行  
く上田のことも打ち合わせていたと通訳が知らせた。そ  
の夜は宿直室に放り込まれて外から鍵をおろした。齒が  
ゆいことしきり、眠れなかった。

翌二十四日十時ごろ、朝食を差し入れた妻と子は  
大変心配、大丈夫かと尋ねた。大丈夫さと答えてなだめ  
た。他の同僚は警務科の広間で一緒にいた。私だけが宿直  
室に旋錠されて別扱いだったことを知った。昼食も夕食  
も抜き取り調べだった。彼らは昼間を睡眠に当て取り  
調べを中断した。夕刻に至り我が家へ帰り、玄関まで彼  
の憲兵中尉が付き添った。帰途、官舎ブロックの入り口  
で警戒兵が犬に向かって発砲、停止を命じた。憲兵との

間に応答を交わし無事に我が家に戻った。その夜は逃避  
して我が家に集まっていた下僚や知人、家族合わせて十  
七人が水杯を交わして夕食をとった。そして皆に向か  
い、明日は延吉へ連行するようだが、ソ連式の警備訓練  
でもやって二週間もたてば帰すだろう、帰れば皆さんと  
そろって日本へ帰れることになるだろうと、慰撫するよ  
りほかは手がなかった。皆が高ぶる恐怖感を押し静める  
ことが先決だと見たからであった。翌二十五日、警務科  
員一同並びに日系満軍将校数人と同乗、トラックで延吉  
へ移送、将校収容所で一泊、二十六日夕刻私は同僚と分  
離され、憲兵中尉のジープで延吉将務機関跡の留置場へ  
放り込まれた。同室に岡部間島省警務庁長がいた。眼鏡  
をかけた同庁長に早速聞いた。あなたはどのようにしてここ  
へ。わからぬ、合点がいかぬ。自分は延吉駐屯地司令官  
たちと同行してソ連軍司令官を出迎えに行き、自宅に帰  
り官服を脱ぎ平常着と替えをしていたとき、ソ連軍將  
校が門扉より浸入、岡部さんちよっと来て下さいと連れ  
出され、そのままジープでこの室にぶち込まれたのだ。  
庁長は悔しそうに語った。

数日過ぎて間島刑務所未決監に移り、取り調べ中、延吉憲兵隊長白浜中佐が青酸加里服毒自決を遂げた。ソ連軍は大慌て、そして平壤刑務所へ我々を移送して取り調べを再開反復した。ここで間島省保安局要員と特務科要員は岡部庁長以下二十数人が二十年から十年の刑を受け、私は分離された。

翌一九四六年二月二十日平壤出発。日系高官や公務員、協和会職員並びに朝鮮咸鏡南道知事岸勇吉以下警察官、そして朝鮮人反ソ分子等抑留者混成で琿春まで鉄道輸送、琿春より陸路トラックで哈達門經由ソ連領沿海グロデコ収容所に移送され、二月末日到着したのだった。

## 二 入ソ後グロデコ収容所四十五日間

一九四六年二月末日グロデコに移り、古い兵舎の一室に四十五人が装具を解かずにし詰めの収容、なすことなく四十五日間が過ぎた。この間黄海道知事筒井武夫と同道金某警察部長とが口論となり、会寧の金某牧師が激昂して粗暴な言語で、過去三十六年間の暗黒政治を忘れたか、我々は忘れないぞと怒鳴り、筒井知事の顔を殴った。見るに忍びず立ち上がった熊本出身の清水咸興警察

署長が中に割り込み、暴力はよくない、暗黒政治云々は後世の史家がきめることだと力説して静めた。この勇氣に敬意を表した。

## 三 中央アジアへの移動

同年四月六日グロデコ発、二十五日間有がい貨車に揺られシベリア鉄道を西進。チタを越えバイカル湖を南下してノボシビルスクで下車、国際浴場というシャワー仕掛けの浴場で、実に六十日ぶりに体のあかを落とし命の洗濯とも思えた。広い浴場内は何百というシャワーが天井の上から雨が降るような仕掛けであった。初めての体験だった。東洋では中国でも日本でも浴槽の中にゆっくりと浴みしてこそ入浴のよさを覚えたものだが、この国柄は違うと思えたのである。ようやくにして、五月一日メーデーの日、中央アジア・タシケントに着いた。

ここでもシャワーに連れられ遠い道のりを歩行で、我々の隊列の両側に警察犬を連れた警戒兵がいかにも誇らしく、浴道にたくさんウズベック国の見物人が埋め、我々と行をともにした多くの白系露人を見て驚いていた。これは一つの対内宣伝だと直感した。敵国日本を

下したソ連軍の勝利を示すものだった。遠い道のりをな  
ぜわざわざ歩かせるのかとふんまんやる方なかった。そ  
してタシケント刑務所ではまる百日間監禁された。

ここでは食事が急変してキャベツ、トマト等の中身が  
多い野菜スープに黒パンも大きく、定量だった。寝室も  
清潔で、衣服は殺菌が行き届き、取り扱っても丁寧だった。  
毎日運動へ屋外に出ると、雲一つない澄み透った青空は  
高く、遠くかなたの天山山頂は白く雪化粧をしている。  
それは素晴らしく峨々たる連峰は鋸の歯のようにとが  
り、さすが地球の中央に端座しているようだった。ここ  
は昔日本の高僧某がああ天山を越え西域、中国を抜け日  
本へ帰ったという話を聞き懐かしくもあった。シルク  
ロードの道筋でもあったようだ。

九月十四日フェルガナに移され、綿織り作業に回され  
た。朝から晩まで立ち通しの綿織り作業に出て疲労も加  
わった。思えば抑留から監禁の一年有余の厳しいおりの  
中で衰弱は加わり、病人もたくさん出たが、タシケント  
刑務所でやや取り戻し、今、労働の社会に送り込まれた。  
この国は労働を最高の荣誉とする国で、一年前間島刑務

所内で某少佐が上司を射殺したかどで刑十年を受け、  
ラーゲルで労働することになったと同室の者に告げ、小  
踊りした様子を思い出すのであった。十一月十九日、忘  
れもしない零下三十三度の寒波襲来、作業休となり越冬  
することになった。まるで休業ではなく、ここ特有の降  
雪作業に狩り出されるのであった。カナルという天山  
より流れる河川の水を運河にして農耕用に、またラーゲ  
ルに引く水路をふさいだ降雪なのである。ある日、遠く  
のあなたで大きなねんが建てのビルが立ち並ぶ都市が見  
えてきた。あれはどこだと騒いでいたら、ブルガジルが  
蜃気楼だと教えた。ではどこの都市だ、米国か英国か、  
はたまたヨーロッパのどこの国かと、いろいろ推測説も  
飛んだが、やがてどこともなく、立ち消えた。

この地は二月中ごろになれば雪は消え、暖かい陽光が  
差し、小春日和となる。舎外の広場では各県人会ができ  
て、我が熊本県では奉天の村上某検察官を長として三十  
数人が集まりこれまでの苦勞を語らい、あるいはあんな  
が早く帰ったらばくは無事だと家族に伝えてくれと頼む  
のであった。そして元気で帰ろう、健康で頑張ろうと励

まし合った。

五月の初め農場作業につき、トマト園の移植が始まり、片道二時間を要する広い農場で、大きく長くうねったかまぼこ型の畝の上にトマトの苗を植えるのだが、畝と畝の間の溝はカナールからの水を注ぎ、水分を与えてトマトの成育を促すのだ。数か月たてば赤く見事に熟した実がなる。収穫物は国の財産だから勝手に食べてはならぬ、違反した者は罰することだが、だれでも目の前のものを逃がす者はいない。適当に食べながらもぎり、指定の場所に運んだ。この法則がソ連の特徴だと見えた。お国柄が全く違うものだ。独裁の国は末端で抜け穴ばかりが露出している。

またべつのラーゲルでは、広大な水田の除草作業にっていた。沿海州から強制移住させられた二十万人の朝鮮人の姿は見えなかったが、ただ一人三十歳くらいの一朝鮮青年が我々の身辺にいて農作業に従事していた。日本語が堪能で、いつ入ソしたとは言わなかったが、妻との間に子供が一人いる。この国では二人も三人も子を産めば生活ができないとも言った。それは真実かと尋ねたほど

だった。

四七年夏、コーカレトに移り、肥料工場で働かされた。貨物車の中から硝石粉を卸下する作業で、十時ごろにわか発熱、作業から離れ軒下に寝かされた。フハイカを頭からかぶりガタガタふるえていた。マラリヤに冒されたのだった。医療手当はやってくれなかった。そこへ一人の若い婦人が通りかかき、「ヤボンスキード、マラリ―だ」と声をかけた。そうだと返事したら、頭の上に載せていた黒パンを大きく割って与え「食べなさい」と言いつつ辺りを警戒しながら何処かへ小急ぎに走り去った。ウズベック共和国のこの婦人の親切に驚き、最高の敬意を表した。

四八年十一月三日、我々は中央アジアより集団でハバロフスクに移動してきた。第四分所農場に配属させられた。

#### 四 凍 傷

ハバロフスク第四分所で豚小舎の寝わら運搬に従事した。十二月の初め、午後五時作業やめの合図により馬具をはずしていた。そこへズングリした中肉のロシア人所

長が来て「上田、もう一度捨ててに行ってくれぬか」と、半命令だった。

しぶしぶ馬具を再び整え寝わらを車に積み、捨て場へ急いだ。早く行かねば日が沈む、心ははやるばかり、馬よ走れッ、むちを当てて飛ばした。四キロ余の道のりだ。果てしない広場のかなたはずでに夕日が地平線に落ち、天空いっぱい朱に焼けていた。ほどなく日は沈み、シベリア特有の寒気が襲った。車の上でピリピリッと右足の爪先が異常な感覚を覚えた。寝わらを捨てて帰途につく。遠くに光る電灯はかすかにまばらだった。

厩舎へ戻り駄馬を収容した。馬糧はすでに配られていた。足先が気がかりで洗面所へ急いだ。薄灯の下で踏み台の上に載せた右足を見ると、母指の外側に母指大の白い泡が生じているではないか、「困った」とつぶやいた。隣に居合わせた虜囚仲間が「それは凍傷だ。大変だ。今晚は遅いから明朝診断を受けることだ。だが凍傷はソ連がうるさいぞ」とつけ加えた。ぼくは過去満州で十五年の生活の中で山野を駆け回ったこともあるが凍傷の経験は一度もなかった。後悔先に立たず、後の祭りだった。

翌朝本部に届出て受診した、凍傷と決診、作業休を命ぜられた。やれやれ作業休か、それでもうれしかった。厳しい労働の毎日明け暮れの中での作業休は何よりの清涼剤だった。強制労働から離れることはうれしかった。しかしこの喜びもつかの間だった。

十一時過ぎ本部から呼び出され、今度は室内作業のことも編みだった。当時、日本軍虜囚の間では平塚運動という民主運動の一環として、強制労働の合理化と労働能率の向上と労働優秀者を優先して日本に帰すというロシア式スタハーノフ運動の日本人適用の運動だった。従って私の凍傷もこの線に漏れず、労働が優先、治療は後であつたわけだ。

一九五六年祖国復帰の後もなお数年間は続き、つまづいたときは飛び上がるほど痛み、ひるむのだった。生まれてつきの肉と皮膚に復元するまでには実に十五、六年の長い歳月を要した。後遺症となり傷跡となつたのである。

##### 五 懲罰大隊へ転属再び障害をこうむる

懲罰を主とする山の第八大隊とも称され、我々虜囚の

間では極力恐れられていた。山は死を伴う災害が多かったからである。他面ここは一旦くせも二くせもある強者ぞろいであり、虜囚仲間同士が心を開いて互いに語らえる場所ではなかった。ノルマに追われたお互いが山と積まれた丸太を貨車積みにする重労働だ。捕虜の体力は落ち、栄養失調患者多く、青ざめ、目のふちはふくれ上がり、よぼよぼ歩きの患者までが労働に追い回された。夜は小便が近くて寝台からおりたときはかなり疲れ、しかも便所は宿舍からかなり遠く、着いたときはほとんど漏れて、袴下の全部はいつも湿っていたほどだ。これを繰り返して、睡眠が不足してますます栄養失調は高進するばかりだ。このため死者は相次ぎ、山の凍土に捨てられた。虜囚の帰国を願う心を悪用したスタハーノフ運動という美名に隠された術策に陥った虜囚の民主化運動は、我が虜囚仲間の相互にクサビを打ち込み、心を開いて語らせる場所さえも失わせた。それは一面密告となり、ソ連政治部に細大漏らさず筒抜けとなったからである。

私の場合は四人一組の作業組となり、山と積まれた丸太の上で四人が一本の丸太を腹ばいとなり、あたかも尺

取り虫が寸刻みに進むようにしてゴロを使いながら貨車に近づけるのだが、腹ばわねば、半かがみの姿勢では体力が衰えて作業にならぬから、やむを得ず腹ばいになったのである。やつのことで貨車に積みこんだ折、丸太が崩れ落ち、ゴロが飛んで私の右前腕をたたいた。いやというほどの激痛で、眼底から光が発してひるんだ。不幸中にも幸い、丸太は反対側に倒れた。ようやく正気を取り戻し、作業場を離れて医務室へ走り込み、ヨーチンを塗り、その日の治療は終わった。

翌日医務室へ行った。治療の後、君は右の腕は使えぬが左手は使えるだろ、今日から自分の間負傷者のヨーチン塗りだ。にわか仕立ての看護兵を命ぜられた。ソ連という国は血も涙もない冷血な労働偏重の国だと痛切に思えた。それも後でよく考えてみれば、第四分所での寝ながら運搬中の凍傷によりこの懲罰大隊に転属となったが、それ以前の凍傷の前、私の外数人が所長室に呼び出され、作業態度が不良だ、改めよという嚴重な注意を受けた。私にしてみれば腑に落ちなかった。所長の注意をよくよく検討してみれば、所長のとった注意の裏には、だ

れかの密告があったからだ。

それとも、その後ソ連の独裁体制の中で、密告政治は所長自身の不都合をば捕虜を悪者に仕立てて点数を稼ぎ、自身の不都合を埋めた策略だったのか。作業終わった後、わざわざ厩舎に足を運び、夕闇迫るのを知悉しての労働の追加作業を命じた。そのあげく凍傷を生み、そしてそのまたあげく懲罰大隊へ転属さして死のふちへ追いついたのだ。懲罰大隊へ送るまでの計算を入れての追加作業命令であったのだろうか。あまりにも不合理の多い虜囚生活だったのだ。

## 私の抑留

岐阜県 山田好美

私の終戦地は満州の鞍山でした。

ソ連軍より製鋼所の解体作業が申し込まれ、解体終了後日本へ帰すとのことであった。みんな黙々として作業をした。

解体も済み全部貨車へ積み込んだある晩のこと、「みんな持てるだけのものを持って集まれ」と伝言がくる。みんな帰れると思いき集合する。「各自食糧を持って貨車に乗れ。」との指示が出る。乾パン、缶詰を持てるだけ持って貨車に乗る。列車は走り出す。西も東もわからない。朝になり列車がとまる。

水の補給連絡がきて貨車の扉を開けて外に出る。現地召集の一人が「あ、新京だ、方向が違う」と叫ぶ。ばらばらと四、五人が貨車から離れて隠れる。貨車の上では兵隊たちが逃げまどう小隊をねらい射ちしている。将校たちはハンケチを標的にして射撃練習をしている。この時点で、逃げるより行くところまでゆけと心を決める。

貨車の扉は旋錠され、走り出す。暗くて昼夜の別もわからない。一人、二人と小刀で穴をあけにかかる。ただし進行中だけの仕事である。停車中は兵隊がうるさい。ソ連領内へ入ったらしいが、停車しても扉は旋錠されたままである。ソ連人が列車に近寄ってくるのが穴から見える。手まねで時計と煙草や食べ物と交換している者がいる。しばらく走って停車したとき、扉の錠がはずされ、